

天理市の仏教美術調査

美術工芸研究室

桜井市、明日香村、高取町に引き続き県下の市町村単位の第4回として本年度は天理市教育委員会の協力を得て、同市内の158ヶ寺（無住寺も含む市内の全寺院）に伝わる約2,000点の仏教美術の調査を行った。

天理市は大和盆地の中央東寄りから、更にその東側に連なる大和高原の一部を含む地域に位置し、南は桜井市に、北は奈良市に隣接している。この地も桜井市などと同様、大和でも早くから開けたところで、山辺道沿いには大小の古墳が連なり、また、物部、穂積、大倭、和爾、柿本など諸豪族の本貫の地としても知られている。しかし仏教文化に関しては、6世紀中頃にわが国へ仏教が伝来した際、当地の中心的勢力であった物部氏が排仏を唱えたためもあって飛鳥時代に寺院が建立された記録もない。現在のところ遺跡も見当らず、石上町寺内、榎本町長寺、柿本寺、和爾町願興寺、森本町光明寺などの旧跡から奈良時代の古瓦等が出土しており、当市ではこの時代からようやく寺院が造営されたと考えられている。しかも仏教美術の遺品もこの時代のもは残っていない。遺品は彫刻を中心とした10世紀以降の平安時代の作品が多数伝えられており、平地部、山間部を通してこの地にも仏教が浸透していったことがわかる。中世に入ると東大寺、興福寺など南都寺院の庄園になるところも多く、長岳寺、永久寺、竜福寺などこの地の大寺は興福寺の勢力下に入り、また交通の要所として栄えたこともあって仏教は更に隆盛し、現在でも各大字の寺院に中世の仏像が多数伝来している。絵画や工芸品は宗教行事等の実用に供されるもの、或いは紙や布など脆弱な材質であるため室町時代の作品が散見されるが、大方は近世のものである。しかし、涅槃会の本尊仏涅槃図や梵音具などは各大字の寺院の殆どに残っており、それらには制作年時や寄進者が記されており、この地の近世における民間を中心とした信仰の様相を知る好史料となっている。

本調査でまず注目されたのは平安時代の彫刻作品である。市内では従来、東西井戸堂区有十一面観音立像、和爾善福寺阿弥陀如来坐像、柳本長岳寺阿弥陀三尊像（仁平元年銘）などが知られているにすぎなかったが、今回の調査では80点を上廻る作品が確認された。中でも古様を示すものとして善福寺の定印の阿弥陀如来坐像（像高56.7cm）合場町公民館所在の葉師如来坐像（像高87.6cm）の二軀の一木像がまずとり上げられよう。善福寺像はその根幹部を桧の一枚材から彫成し、内割はなく、その表現も如何にも一木造らしく重厚で、9世紀末にまで遡りうるものである。また合場町像は前者に比べると表現がやや穏やかになっているが、櫛の一枚材から彫成し、背割を施す構造で、整備された感はあるが翻波式衣文など古様を留め、像容も整って10世紀の制作と認められる市内屈指の古像として注目された。この地、布留葉師堂菩薩坐像（像高230cm）、仙之内葉師堂如来坐像（像高82.5cm）の二像は火災に罹って表面が炭化しているが、いずれも10世紀に遡る一木像で、石上神宮にゆかりの遺品として当地の歴史にとって見逃

すことのできないものである。11世紀の一木像も少からず伝えられており、それらは表現に地方的なところも見られるが、奈良や桜井に隣接する当市の歴史の古さを物語るものであろう。なお、当市の平安一木彫の特色として上げられることは、櫛材を使用しているものが多いところである。一般に近畿地方では桧材の彫刻作品が圧倒的に多く、その他では榎などが用いられているが、櫛材の例は天理市に隣接する桜井市、大和郡山市、斑鳩町などで二、三が知られているにすぎない。現在の和歌山盆地には櫛はそれ程多くはないが、天理市内では例外的に集落や社寺の境内に櫛が植えられていることが多く、平安彫刻に使用された櫛材も、あるいは当地で調達されたものではないかと想像され、興味深いものがある。12世紀の作品は山間部、平地部を問わず万遍なく伝えられており、量的には隣接地をしのいでいるといえる。それらは当時の中央の作風につながる温かな表現の寄木造の作品から素朴な表現の如何にも在地仏師の手になったと見られる一木像まで多岐にわたっている。

鎌倉時代は当時隆盛を極めた内山永久寺が廃絶したため目立った作品は残っていない。前半期の作品は平安後期の旧様を引くものが殆どで、後半期の作品に特色のあるものが存在している。中では小路常福寺如来立像(像高29.8cm)が快慶の作風を引く、いわゆる安阿弥様の作品として注目され、その他、山田蔵輪寺地藏菩薩半跏像(坐高33.5cm)、豊井豊満寺千手観音立像(像高54.9cm)、高品観喜天堂地藏菩薩立像(像高157.0cm)など個性豊かな作品が存在している。室町時代は100点を上回る数が伝えられている。当市内では16世紀に奈良県下一帯で活躍した宿院仏師の在銘作品として中定西念寺十一面観音立像(享禄4年—1531)、南六条釈迦堂釈迦如来坐像(天文13年—1544)が知られている。今回の調査で銘文等は確認されなかったが、宿院仏師の手になると見られる数点の作品が明らかとなった。また、この時代の他の作例も比較的像容の整った本格のも少なく、中世における当地の繁栄の様を伝えているものといえよう。

絵画、工芸作品は残念ながら鎌倉時代以前に遡るものは見出されなかった。当市の場合

も桜井市と同様、近世の仏涅槃図が市内の半数以上の寺院(会所寺等を含む)に80点が伝えられていて、その大半が裏書、箱書などによって制作年時、願主、施主などが判り、しかも、今でも2月15日の涅槃会に使用されているものも少なく、近世における民間

信仰やその形態を知る上で好箇の資料といえる。この他絵画作品では浄土系寺院に伝わる阿弥陀来迎図が注目された。これらは聖衆来迎、十一尊仏、三尊像に大別されるが、涅槃図と同様制作年時等を記すものが多く、近世の仏教資料として注目されるものであろう。工芸品も絵画と同様近世の作品が殆どであるが、小野味葉師寺の鯛口に「應永二三年八月日大願主藤原□國」の刻銘があって市内最古の在銘品として注目された。これら工芸品は半鐘、鯛口、証鼓、伏鐘等の梵音具（約100点）が殆どで、その半数以上に制作年時、制作者、願主等が刻まれていることが特記される。